



Title	The Quest for the Abyssinian Source : The Romantic Myth of Hieroglyphic Representation in William Wordsworth and P.B. Shelley
Author(s)	池田, 景子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57855
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【24】

氏名	池田景子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 23478 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	The Quest for the Abyssinian Source: The Romantic Myth of Hieroglyphic Representation in William Wordsworth and P. B. Shelley (アビシニアの水源への探求: ワーズワスとP.B.シェリーにおけるヒエログリフ的表象のロマン主義神話)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之 准教授 片岡 悦久 准教授 石割 隆喜

論文内容の要旨

本論文は、イギリス19世紀初頭に活躍したロマン派の詩人、ウィリアム・ワーズワス(1770-1850)とP.B.シェリー(1792-1822)を取り上げ、彼らの詩作品において想像力の起源探求のモチーフがヒエログリフ解説の営みと密接に関係していることを検証し、ロマン主義における想像力のかたちを解き明かそうとした研究である。論文は、本論への序論、第1部への序論と2つの章、第2部への序論と3つの章、結論、および注・参考文献から構成されており、論全体で英文で124ページ、和文400字詰め原稿用紙に換算して約450枚に相当する論文である。

本論への序論において、イギリスのロマン派に先立つ時代およびロマン派時代においてはナイル川の水源への関心が高まっていたという文化的状況をスケッチし、そうした状況のなかでジェームズ・ブルースのエチオピア旅行記がロマン派詩人たちに大きな影響を与えたことを指摘する。

第1部では、ロマン派詩人コールリッジの詩作品「クブラ・カーン」に登場する「アビ

シニアの乙女」はコールリッジのミューズの象徴であったと述べ、このコールリッジの関心とワーズワスおよびシェリーにおけるナイル・アビシニア・エジプトへの関心とが深く関わっていることを主張する。第1部第1章では、ワーズワスの『序曲』第6巻を取り上げ、想像力の起源を表す“abyss”のモチーフがナイルの水源と結び付けられて描かれている面に注目する。同第2章では、シェリーの『アラスター』に描かれる詩人の旅を取り上げ、詩人がアテネからエジプトを経てエチオピア(アビシニア)に向かい、ヒエログリフに出会う旅を、詩的源泉を求める営みであると解釈する。

第2部において、ロマン派のヒエログリフへの関心はその視覚性にあつて、ここにロマン派の想像力におけるヴィジョンの視覚的体験とのあいだの深い関係性を見出せると述べる。第2部第1章では、ワーズワスの『序曲』第8巻を取り上げ、羊飼いの像を表出するのに用いられるブロッケン現象の比喩(気象学的比喩)のもつ意味を解き明かし、詩人のペルソナである語り手が影として表象されている意味を考察する。同第2章では、『序曲』最終巻を取り上げ、スノードン山の“blue chasm”で語り手が視覚的に詩的啓示を受けた状況の分析とその意味を考察する。同第3章では、シェリーの『モンブラン』を取り上げ、詩人の詩的ヴィジョンにヒエログリフの比喩が隠されている事実を検証する。

結論においては、ワーズワスとシェリーはともに想像力の起源についてヒエログリフの視覚的表象性と結びつけて考えていたことを述べ、そのうえで、二人の詩人との相違に触れる。すなわち、ワーズワスは想像力が見せる幻影をあえて評価することによりみずからの詩的世界を開拓したが、シェリーにおいては、ヒエログリフに窺えるような不滅の生は肉体的・即物的基盤のうえに構築されるものであったと述べて、ロマン派の想像力についてのより一層大きな輪郭を描出して、論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス・ロマン派を代表する2人の詩人、ウィリアム・ワーズワスとP.B.シェリーを取り上げ、その代表的な詩作品について、ナイル川の起源を求めた旅、あるいは視覚的ヴィジョンを表す象徴としてのヒエログリフへの関心といったモチーフの観点から読解を行い、詩的想像力の根源を解明しようとした研究である。ロマン派の詩人たちに見られた異郷の地エジプトやオリエントへの関心が、本研究においてはより一層掘り下げられて、ナイル川の水源のもつ詩的意味、およびヒエログリフが詩人たちの想像力を刺激する源となっている意味が、豊富な詩句の例証を通して解き明かされたのは、ロマン派研究にとって大きな貢献である。特に、ロマン派第2世代のシェリーの詩『アラスター』『モンブラン』などが、ロマン派第1世代のワーズワスの詩作品と同一の視角から考察されて、想像力のかたちにおける共通点と相違点を明らかにできたのは、有益な研究であった。ロマン派を取り巻く、旅をめぐるイギリスの文化的状況が把握されたことも興味深いものと言えよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。視覚的ヴィジョンとヒエログリフとの関わりについては、より一層の掘り下げが求められよう。また全体を通して、論述の展

開がやや舌足らずになる面があるのも惜まれる。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。